眼の運動と停止のエコノミー——リオタールの経済論的メルロ＝ポンティ視覚論批判

浅野雄大（東京大学）

本発表は、1970 年代 J-F・リオタールの代表的著作であるのにもかかわらず、方法論・主題において大きく異なっているために本格的に結びつけられる機会がほとんどない『言説、形象』（1971）と『リビドー経済』（1974）における視覚論と経済論の交差を、メルロ＝ポンティ批判を手がかりに検討するものである。

初期リオタールのメルロ＝ポンティ受容に関する Gasché の論考は、リオタールの『言説、形象』において論じられるメルロ＝ポンティ批判をデリダ以後の脱構築の変種として捉えつつ、特に後期メルロ＝ポンティの「超-反省[sur-réflexion]」を「反省による分裂以前にある存在」の再発見を欲望する自己批判的な概念として、それをリオタールの脱構築的形象論に結びつける（R. Gasché, The Force of Deconstruction, 2014）。これは構造主義を含む安定性を志す反省哲学を解体する不安定性を志す超-反省という対比を明確にしており、リオタールの脱構築的戦略を見事に説明したものである。

しかしこの研究はなお形象-視覚論的含意、および『リビドー経済』に結実するような経済論的な含意は十分に検討されていない。書字を強調するデリダの差延経済に対して、リオタールは形象を同じく経済論的に思考していたのは疑いないものである。確かに『言説、形象』において経済論的な記述は全面化していない。しかしそこでは眼を欲望として捉えるリオタール独自の枠組みのなかで、その「運動」と「停止」という対立が見られる。眼の「運動」は見るべきものを定立する働きであり、これは空間や言語的秩序の組織化（間化[espacement]）に関係しており、一方でその「停止」はそうした運動を脱構築する批判の働きであり、「超-反省」やセザンヌの絵画はこれに関係している。ここに『リビドー経済』における欲望というエネルギーの経済論的問題構成を見て取ることができる。

以上のように本発表では視覚の問題に限定して、『言説、形象』を『リビドー経済』における経済論的な枠組みを照り返して読解する。そのために本発表が着目するのは、リオタールのメルロ＝ポンティ身体-視覚論批判である。リオタールは度々メルロ＝ポンティの視覚論、ないしその条件としての身体論を参照しながら、形象空間と言説空間の関係を「運動」と「停止」を二極とする経済論的枠組みで捉え直している。先述の「超-反省」との関係の中でこのことを分析することで、彼がメルロ=ポンティの視覚論をいかに脱構築の道具立てとして発展させたのか、そしてどのように批判的に乗り越えたのかを明らかにする。このことは（文字ではなく）形象と視覚の優位という特性を基礎に、デリダと距離を取りながら提起したリオタール独自の「脱構築」の戦略的位置づけを再定位するための視座を提供するだろう。